

職人の仕事 経師

橋口 侯之介（誠心堂書店）

§ 職人仕事に目を向ける

江戸時代の和本の装訂は、楮紙を用いた袋綴ふくろとじが大半である。九割方そうだといってもよい。しかし、残りの一割は異なった装訂法でつくられる。卷子本かんすほんも相変わらず存在したし、糊だけで綴じる粘葉装てんじやうそうもあつた。鎌倉時代以来の息の長い優雅な製本である列帖装れつじやうそう（綴葉装）や、今でも読経に使われる折本おりほん、書画などの掛け軸（幅物）から錦絵、俳諧の歳旦、地図などの一枚物、畳み物も加わる。そう考えると一割以上の多さといえるほどである。

和本を扱う世界では、このように仕上げることをあえて「装訂」ということにしている。現代の出版界では「装丁」といい、人によつては「装幀」とも書く。一部に「装釘」という文字を用いる人もいる。

長澤規矩也『図書学辞典』によれば、「釘」は明治期の製本職人による誤用で、金属を使わない和本では意味をなさない。「幀」は（トウ）であつて、絹などを装することから来ており、軸物などを表装する場合

には用いてもよいが、書物には使わない。

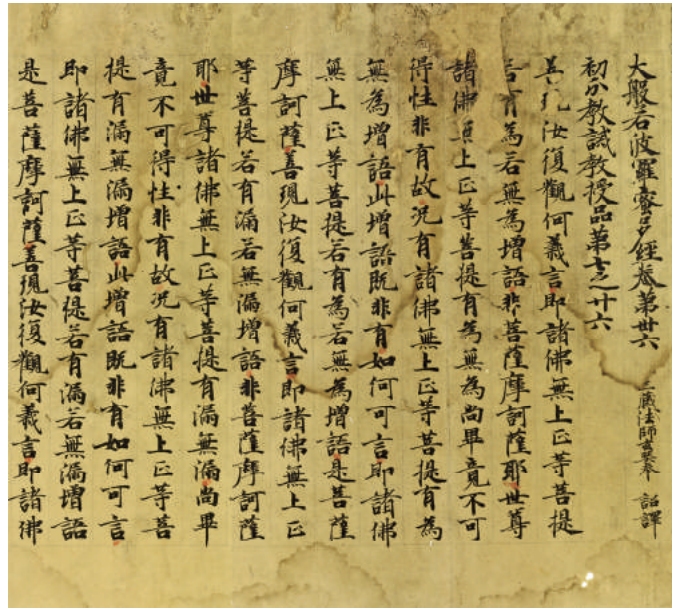
丁は訂の略字で、装丁は『日本国語大辞典』によれば国語審議会で昭和三十年代に「同音の漢字による書きかえ」として採用されたものらしい。つまり、本来は「装訂」なのである。

現在の書籍でいわれている一般的な「装丁」というのは、カバーや表紙のデザイン、色の決定、紙質の採用などデザイナーの仕事だ。製本そのものの、あるいは綴じることまでは仕事に入らない。しかし装訂の本来の意味は、むしろ製本を含めた仕立てまで含む用語である。

§ 奈良時代の経師

和本をさまざまな形態に仕上げるのは、多く職人仕事だった。今回はそんな装訂と、それにかかわつた職人として古代・中世の経師きやうし、またはきょうじに目を向けてみようと思う。この時代の仕事は、近世の盛んな書物文化を生み出し、ひいては現代の書籍と密接につながっているからだ。

写経が朝廷の重要な仕事であつた奈良時代、写経されたものを卷子本に仕立てる工人を装潢手せうかうしといつた。この語は平安時代以降使われなくなったため、現在では知る人も少なくなつてしまつたが、料紙を整えて製本することを「装」といい、紙を染めることを「潢かう」といつたことから来ている。経典を白紙に書くことは忌避されていたので、料紙は必ず色で染めた。大半は黄蘗きはだなどで染める黄色系の紙で、それを用意したのが



装潢手だった。

うだ。

令制では（手）をつけるが、しだいにこの工人自体をただ装潢と呼ぶようになる。従七位程度の地位があった。

それでも人のすることである。誤字も出る。そういう校勘をする者を校生きょうせい、ようと読むと思つといい、『延喜式』によれば写書手七人に對して装潢手一人、校生一人がついたという。それで見つかると一字書き落したら一文、一行飛ばしてしまつと二十文、誤字は五字につき一文ということがわかる。この罰金は見つけた校生がもらえる仕組みだったそう。この校正を二度することもわかっている。

紙はスムーズに書けるように光沢を出す

奈良時代は仏像をつくる仏師に対して写経する者を経師といい、広義には書写、校生、装潢を含めて経師と叫んだ。「正倉院文書」では彼等が団結して待遇改善の要求をしたことまで記録されている。

は「紙を黏す」

書きあがった写経は、題師と呼ばれる上級の経師によって題が書かれると再び装潢の元に送られる。装潢は料紙を貼り合わせて軸に巻き、表紙をつけていく。製本されて、ようやく完成する。

といつてトロロアオイのような粘液を引いて湿らせ、それを砧きねで叩いていく打紙うちがみの工程だった。その根気のいる仕事も装潢が担った。さらにその紙を定められた寸法に截ち切り、界線と呼ばれる文字を書き入れるための枠を引くところまでおこなつてから経を書く写書手に供する。

写書手（経生、書生ともいう）はこの貴重な紙を無駄にしないように慎重に間違ひなく経文を書いていく。天平の頃、最盛時には年間一萬巻を

平安時代になると経師は、朝廷所属の工人から在俗の職人になり、京の町に住んでいたことが確認されている。それは十一世頃すりきよから摺経すりきよという経文の印刷が始まることと関係があつたと思われる。平安時代に入つても写経は盛んで、とくに供養のために大量の経を奉納する習慣があつた。それに印刷した経を加えるようになるのが摺経で、その装訂は卷子

超える量の写経が行われたといわれるが、ほとんど間違ひがなかったそ

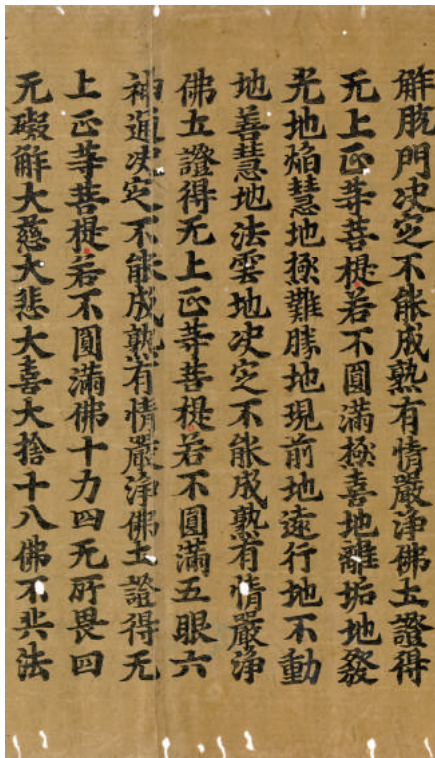
た。それに印刷した経を加えるようになるのが摺経で、その装訂は卷子

本か折本なので、料紙を提供し、糊で継ぐ技術を持った経師に需要があったのである。

鎌倉時代になっても経師の仕事はますます重要視され、南都の興福寺が出す經典印刷物（春日版）においても装訂の仕事を担った。この春日版も随分作られたとみえて、今でも古書市場にしばしば出てくる。鎌倉時代に彫られた「大般若経」などは今でも大量の板木が保存されている。そのため近世まで何度も刷るので残存するのだと思われる。

しかし、いつ刷られたものであっても経師の仕事だとわかる特殊な技法が見られる。装訂が巻物・折本のほかに両面刷りの粘葉装ちんせつそうだったことから、いずれも糊を使った職人仕事であることと、さらに紙を先に継いでおいてから刷る「まき摺り」という方法がとられたことだ。

ふつう木板で刷るときは一枚の料紙しに行かない、刷り上ったものを順番に並べて糊で継いでいく方法をとる。しかし、中世以来の寺院版で



春日版『大般若波羅密多經 卷第三九六』から。

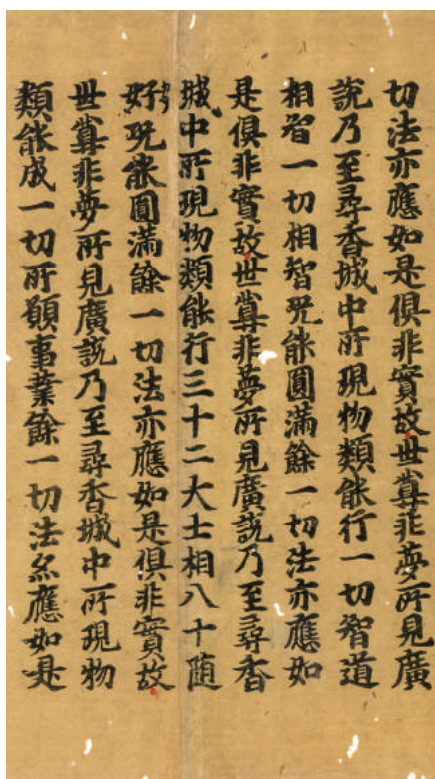
上は継ぎ目に文字が乗っている箇所。

下は乗っていないところ

は逆で、あらかじめ継紙をしておいてから刷るといふ工程である。糊の継ぎ目の上に紙をまたがって文字が印刷されていることでわかるのである。上図のように左から三行目の紙の継ぎ目の上に文字が乗っている。

ただし全長十メートル以上にもなる「大般若経」の一巻分をすべて継いでから刷るのではないことも肝心である。今手元にある本で見ると、料紙はおおむね一枚の幅が五十センチほどである。それを六枚貼り合わせると三メートルほどになるが、そこまで継いでおいてから板木をあてて刷るのである。継ぎ目に文字が乗っていないところが五、六枚ごとに出てくる。それを三回繰り返している。このように一丈半ほどの長さの継紙をあらかじめ用意しておいて刷り、最後に一巻すべてを貼り合わせて出来あがる方法なのである。

現存する春日版の板木はおおむね八〇から百センチの幅である。紙の長さにもよるが、一枚の料紙に一枚の板木で寸法が合うという形ではな



い。板木面と紙はずれていくのだ。これは折本のときにも見られるので、日本の経師独特の技法と思われる。

中国の場合、冊子（胡蝶装）の宋版は一枚の料紙に一枚の板木で刷られているのは当然としても、宋版経（摺本^{しょうほん}||中国の折本）でも紙の継ぎ目に文字が乗ることはない。

S 経師と表具師の違い

この経師の仕事は高野山でも盛んになり、中世を通してさらに各地の寺社での印刷にかかわっていく。

これに対して臨済宗でおこった五山の仕事は別である。南北朝時代には元の刻工が来日して中国の仕様で板木を彫ったのが五山版である。紙一葉ごとに刷るだけでなく、板木に版心をつけて書名や丁数、折り目の目安記号を入れる版式である。したがって、この五山の仕事を請けた職人は経師とは別系統の人たちだったと想像する。江戸時代の版本は、むしろこちらの系統から発した職人によって製本された。後の袋綴が普及するのは室町時代もだいぶ進んでからと思われるが、糸で綴じて糊を使わない本職人の仕事であり、それが江戸時代に続くのだ。

それに対して経師は、江戸時代には暦の発行にかかわっており、京暦や江戸暦は経師の元締め役を果した大経師から独占的に発売されていたし、折本の形態をした伊勢暦も経師系の仕事である。中世末からしだいに盛んになる掛け軸の表装にもかかわったので、現在でも幅物の

仕立てをする店を経師屋という。もともと掛け軸は、表具師といわれる表装をする職人が別であり、襖や障子にもかかわってきて、それも現在にいたっている。近世の初めに表具師が巻物をつくと使い物にならず、逆に経師屋の襖はよろしくない、といわれたりしたように、この二者には微妙に技術の差があった。

感心するのは、今でも残存する古代・中世の卷子の経典は継紙がいずれもしつかり接着していることだ。千年経つてもはがれずにつながっている。これに対して江戸時代の巻物や折帖、地図の中には継ぎ目の糊がはがれてばらばらになってしまうことが少なくない。和装本は、虫がつくこともあるので糊は最小限にする。表紙の題簽などは糊を極力薄くして貼るくらいだ。

これは経師の糊の使い方には秘密があるのだと思う。今後、さらに追究していこうと思っているが、古代の糊の成分や貼り方を知りたいものがある。

●参考文献

- 大屋徳城『鞆楽刊経史』（大正十二年、内外出版社）
- 水原堯永『高野板之研究』（水原堯栄全集1、昭和五十三年、同朋舎）
- 川瀬一馬『日本書誌学之研究』（昭和十八年元版、昭和四十六年、講談社）
- 寿岳文章『日本の紙』（昭和四十二年、吉川弘文館）
- 中根勝『日本印刷文化史』（平成十一年、八木書店）
- 山本新吉『古典籍が語る』（平成十六年、八木書店）

なお、拙文は『古書通信』誌上でも連載しているので、ご覧いただければ幸いです。